

磁場に向けて

2000年～2002年

Toward a Magnetic Field

2000～2002

Matsuo Katoh

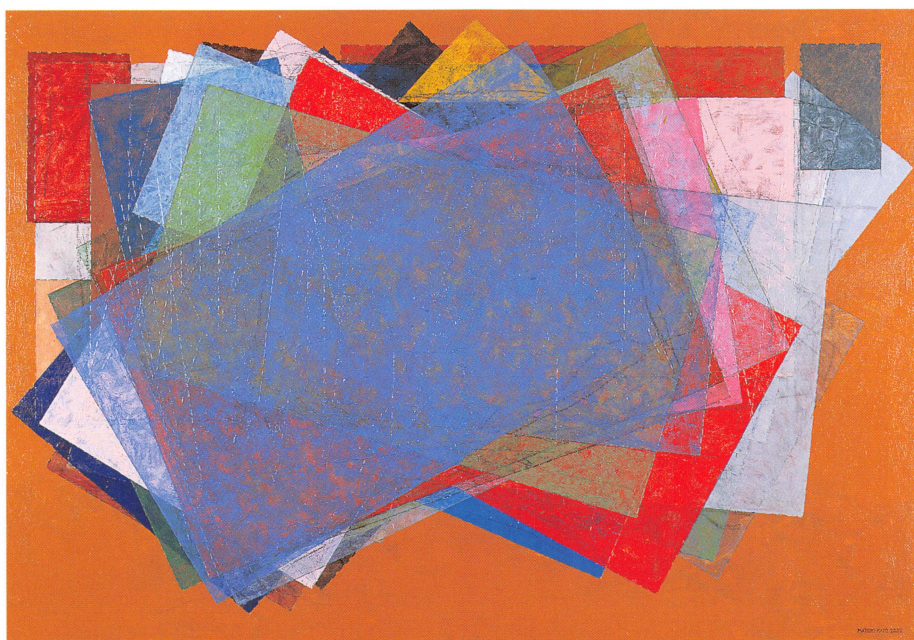
加藤松雄

特定の画面に対して、第三者が接する場を想定する。その場合、まず画面に対して、それを確認する主観は、つぎのかたちを伴う。即ち、まず、視覚による感覚反応、それにつづいて、意味、あるいは知的了解が行われる。精神的レベルとの関わりで、一体化の認識が得られる。その過程は、同時に感情的側面が随伴することによって総体的な把握がなされる。これは、対象の作品を確認しようとする主観が瞬時の場、あるいはその連続において経るところの断面を仮に区分した場合である。表面から内面へ、あるいは、客観の場から主観の場へ、といったみかたは、本体とその属性といった関係図式で考えることもできる。例えば、光の機能についてみたとき、分光器で屈折した光は、分割されスクリーン面に有彩色のスペクトルをつくる。この作用が逆に働いた場合には、有彩色が混合されて白色、つまり透明となる。この因果律は、透明が本体的側面であり、有彩色は、その属性的側面となる。作品画面に接する場は、外界としての属性の場での関りから生じ、認識、感動の内界の場、つまり、本体的側面で完結する。光の場合と同様、密度は、前者は荒く、後者は微細となる。

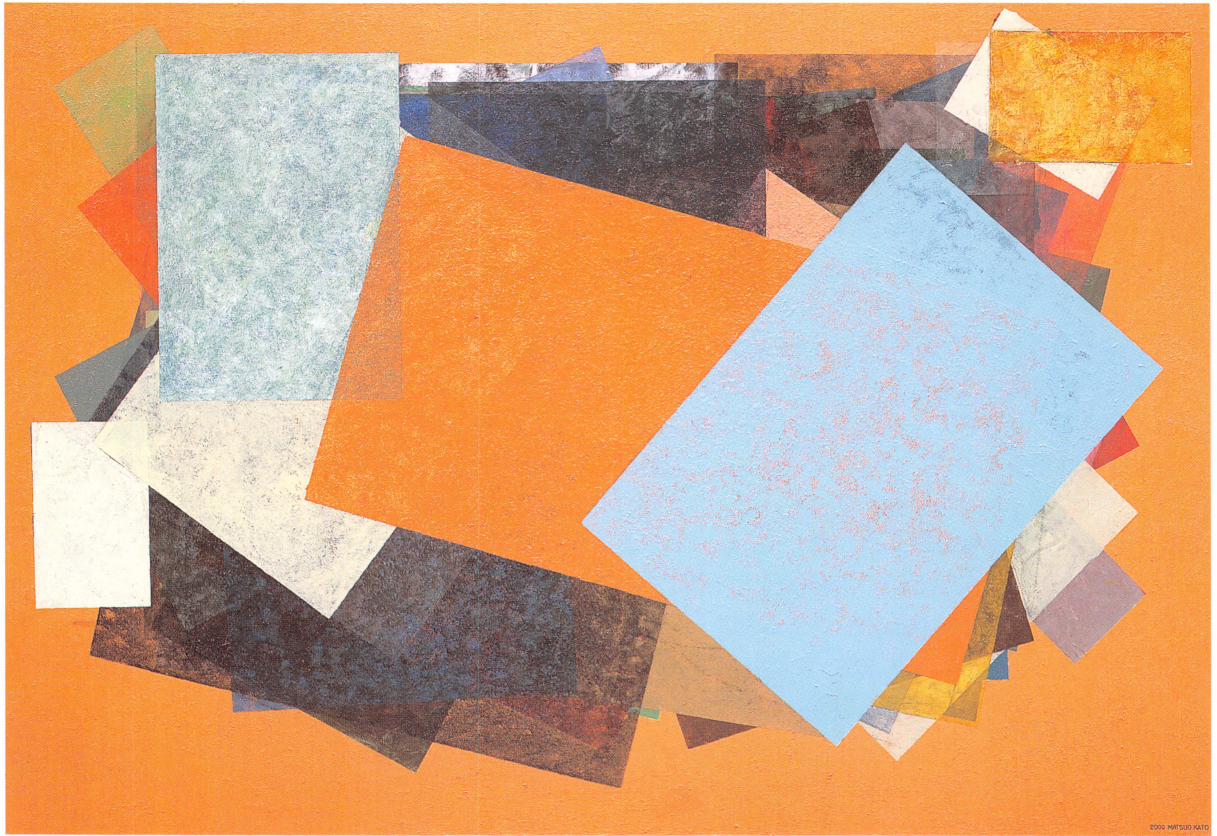
私は、画面上でそれが確認されるプロセスの中でも、感覚反応から、知覚におよぶ瞬時を特に重視している。視覚による確認作用は一般的にみて、まず、画面全体を

捉えようとする反応が先行する。その関りを伴いつつ、視覚は、各々の部分、あるいは、細部へ移行する。その後又、改めて全体確認をしようとする。必要に応じてさらに細部へ…。この視覚反応を通して、主観との関係をつくりだしているもの、この力こそ作品の表現者としては最重要の問題となる。

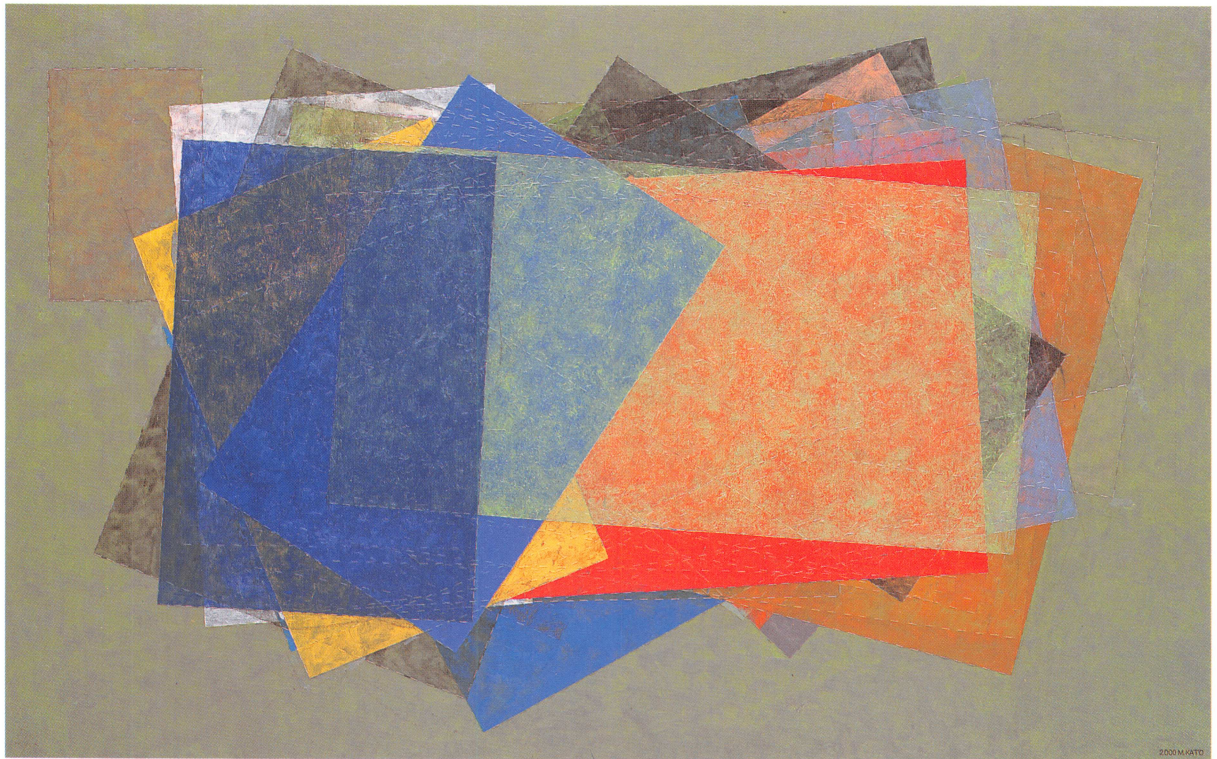
光は、物理的には電磁波のうちに包括され、原子物理学の立場からは、素粒子の一つである〈光子〉から構成されていると解釈されている。そしてその本性は、〈波動〉と〈粒子〉の相反する2面性をもつとともに、エネルギーと運動量をもち、空間に局在した粒子（光量子）とみなさなければならない現象がさまざま見いだされているという。一般的に光は、電磁場の振動が空間を伝っていく波であると説明されているが、では何故、電磁場は振動するのか、という疑問が生ずる。それは、さらに本体レベルへ接近する。テーマ「磁場に向けて」は、いわば、この画面と、それを確認しようとする主観との関係を生じさせ支えている背後の力の場への接近願望からでてきている。又、これは、いわゆる形而上の問題と関わっている…、と考えざるを得ない。感覚器官では直接及ぶことのできない微細で高密度な領域に対しては、まず向き合うことしか方法はないとも思うが。



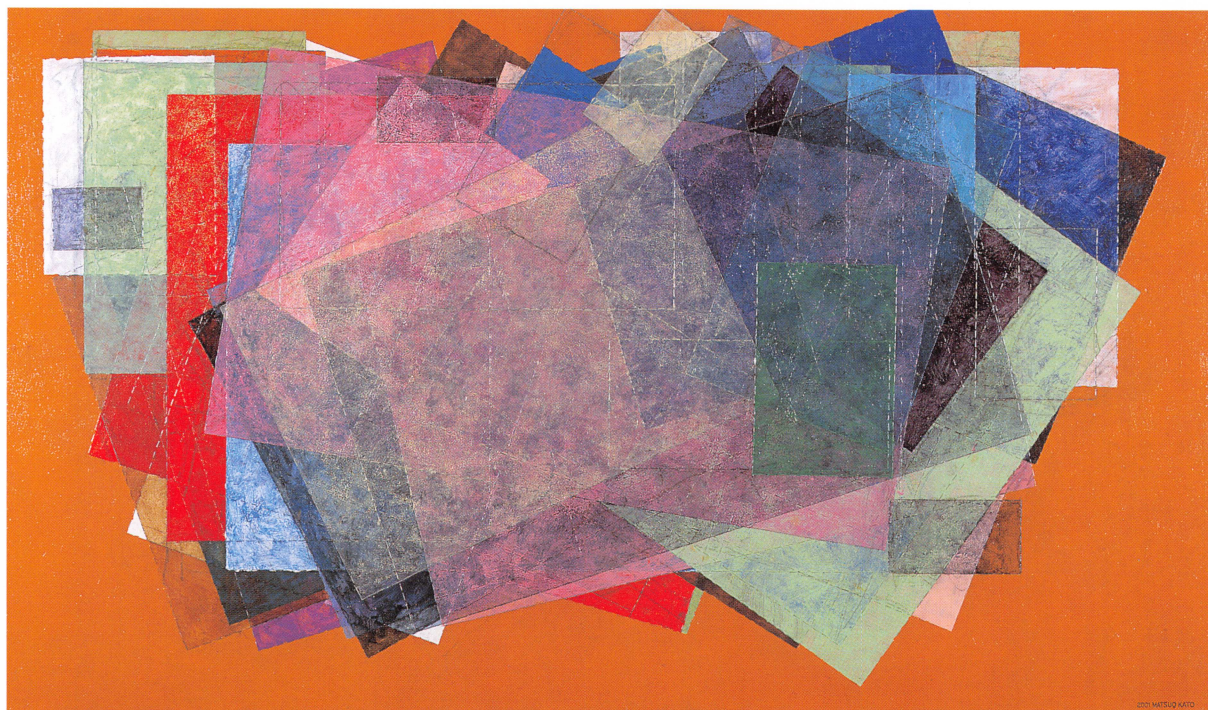
「磁場に向けて2002 A」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩130×162cm
2002年



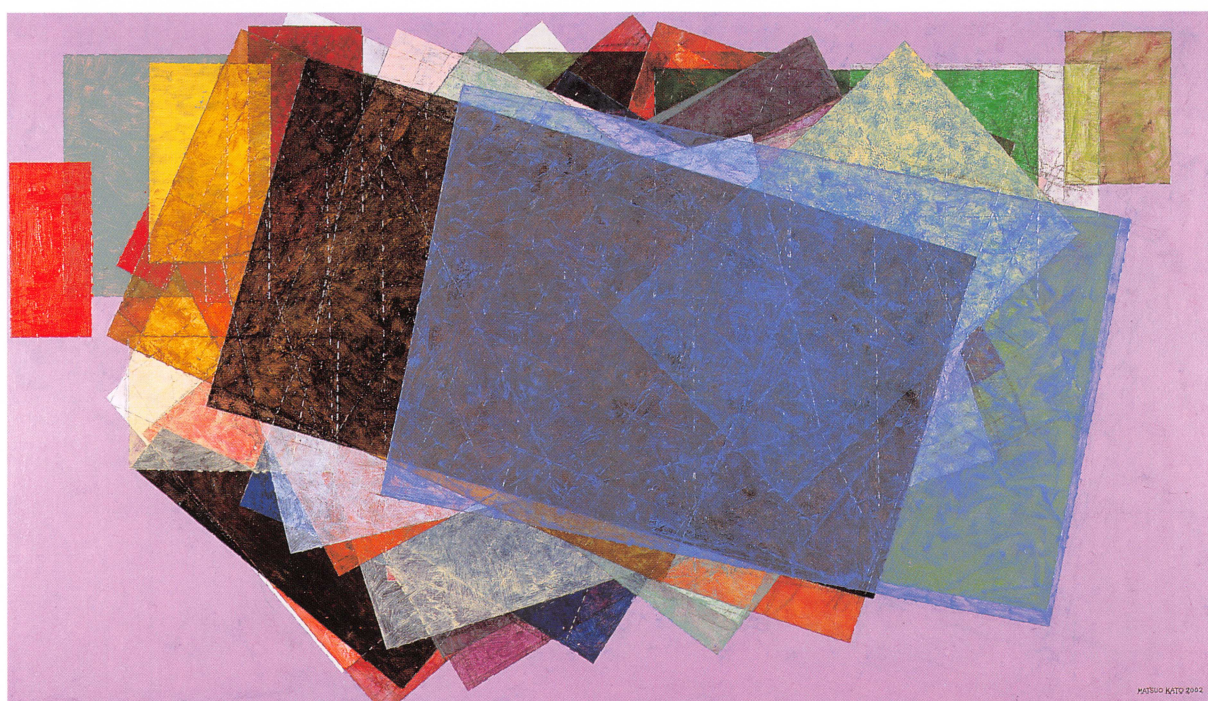
「磁場に向けて2000 K」キャンバスに油彩130×194cm2000年



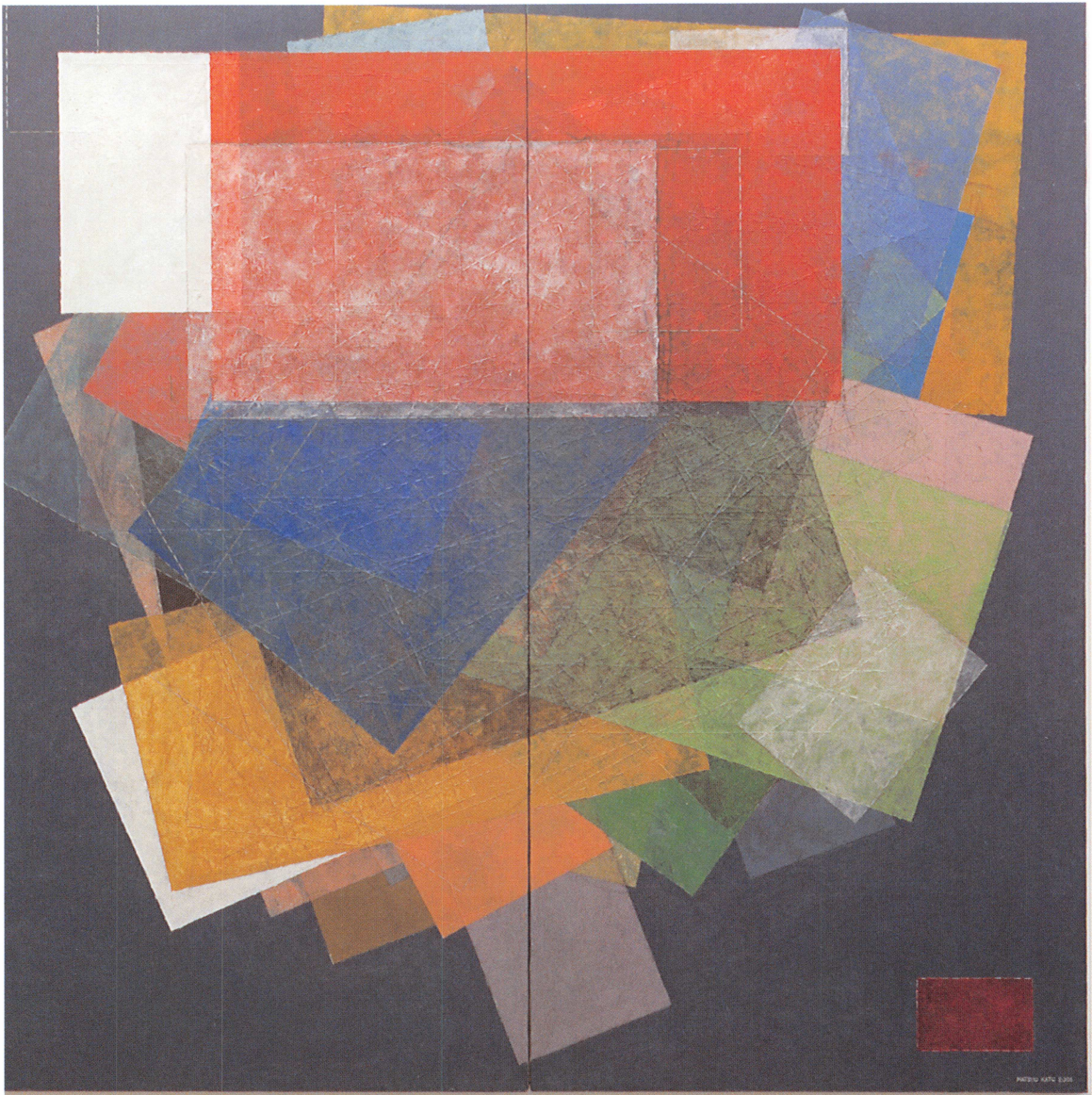
「磁場に向けて2001 I」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×194cm2000年



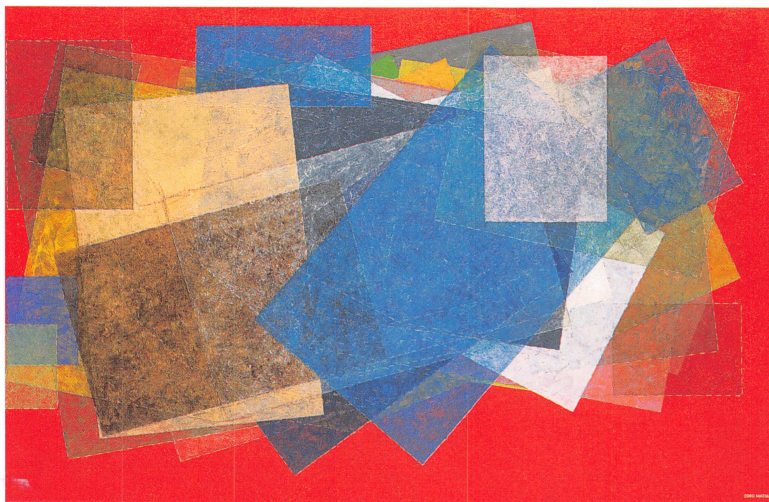
「磁場に向けて2001 J」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×194cm2002年



「磁場に向けて2002 C」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×194cm2002年



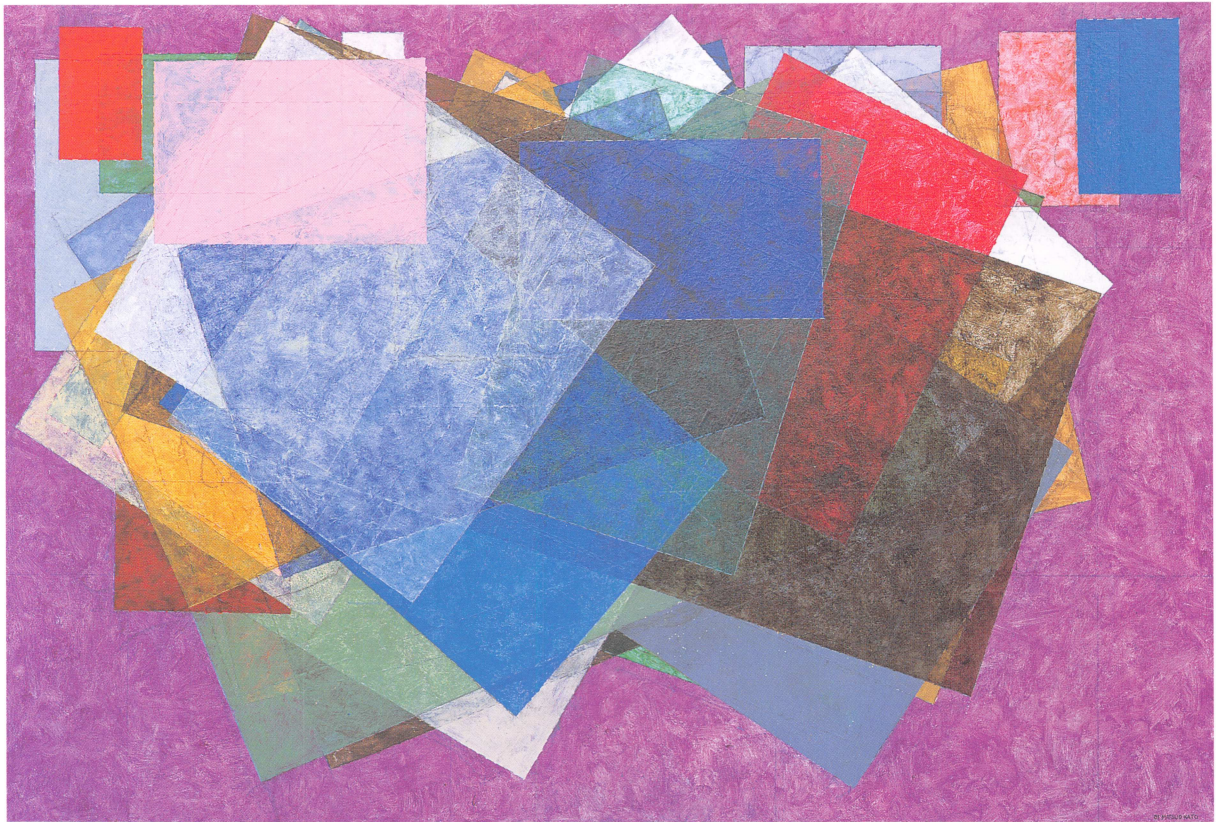
「磁場に向けて2001 A」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩180×180cm2001年



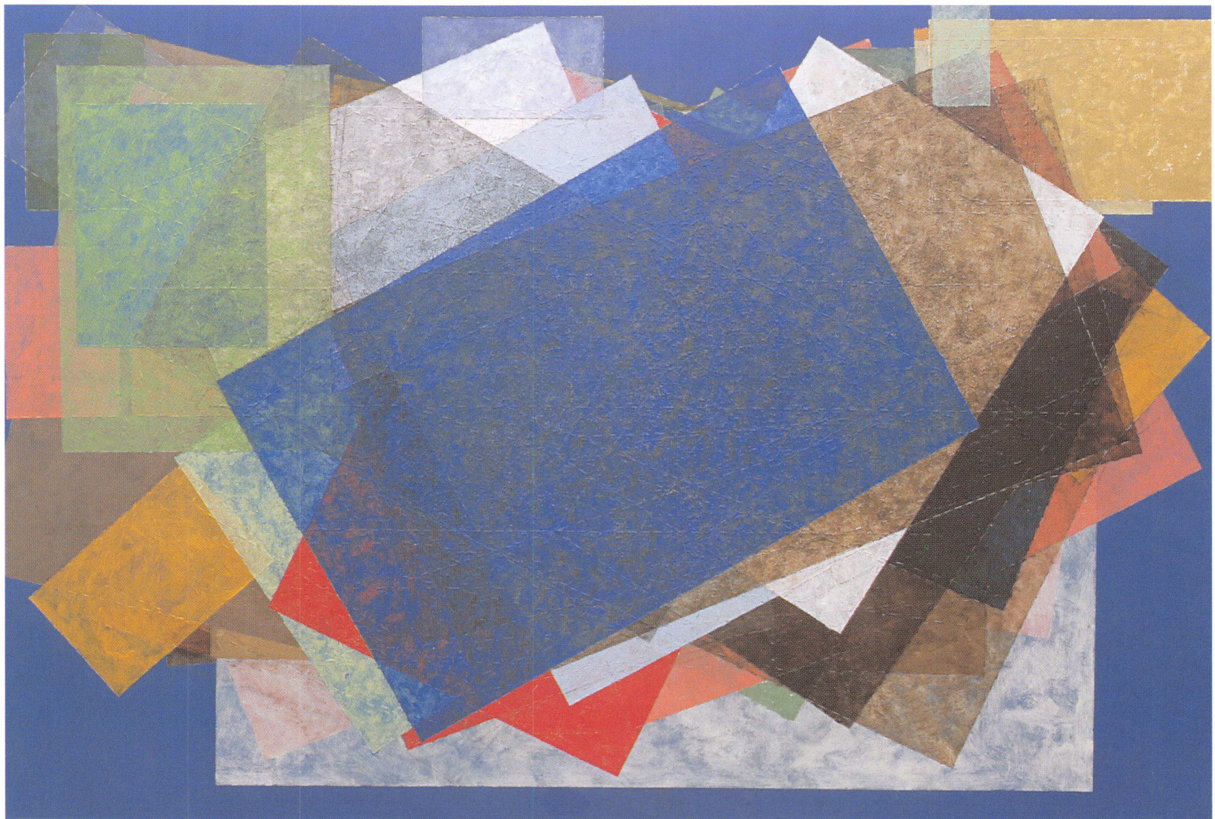
「磁場に向けて2000 J」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×194cm2000年



「磁場に向けて2000 L」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩194×120cm2000年



「磁場に向けて2001 F」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩130.5×194.5cm2001年



「磁場に向けて2001 B」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩130.5×194.5cm2001年